AJCC研究会報告

「興和の秘密とワルツの悲劇」

日時:　2017年7月8日　14時～
於:　日本カメラ博物館会議室

会員番号0954　　小松輝之

興和の秘密

興和という名古屋の会社は、多様な顔を持っている。一番親しまれているのは、薬品だろう(写真1)。キャベジンコーワ、コルゲンコーワ、ウナコーワ、バンテリンコーワ、キューピーコーワ、ガードコーワなど、どれも身近で誰もが一度はお世話になったことがあるだろう。多くの人が興和といえば薬品メーカーだと思っている。またAJCCの会員なら、カメラメーカーだと答える人も多いだろう。現在ではカメラは作っていないが、プロミナーブランドの双眼鏡や、交換レンズを作る有力な光学メーカーでもある。東京湾の海ほたるや、羽田空港の展望デッキには、観光用の双眼望遠鏡があるが、これも興和製である。

興和のカメラにはコーワブランドとカロブランドがあった。コーワブランドの代表は、コーワシックスである(写真2)。1968年に最初のモデルが登場している。1960年代には、コーワブランドのレンズシャッター式一眼レフを数多く世に出している。また、一つ目小僧のようなコーワSW、アメリカのグラフレックス社にOEM供給した小型ガスボンベによる自動巻き上げ機構を持つグラフィック35ジェット(写真3)など極めてユニークなカメラも、コレクターの人気が高い。

写真 1 ケロちゃん

カロブランドはカロ35とカロワイドが印象的なデザインで、記憶に残っている(写真4)。

さてその興和という会社は、明治時代に創業した服部兼三郎(写真5)商店がルーツである。繊維問屋を興した兼三郎は、発明家豊田佐吉(写真6)と仲が良かった。兼三郎は佐吉の3才年下だが、いつも一緒に名古屋の町で飲んでいたらしい。佐吉が発明する自動織機を大量に買って、綿布を売りさばいた。折から日清戦争に勝利して、日本は好況に沸いていた。

商才が無かった佐吉は、いつも発明資金が不足していて、そんな時は、兼三郎に泣きつくのが常であったという。服部兼三郎がいなかったら、その兼三郎と佐吉が仲良くなかったら、豊田自動織機は無かっただろうし、今のトヨタ自動車も生まれていなかったかもしれないのだ。

写真 2 コーワシックス

写真 3 グラフィック35ジェット

写真 4 カロ35とカロワイド

写真5　服部兼三郎

写真6　豊田佐吉

写真 7　豊川海軍工廠

日清、日露の戦争に勝った日本は、第一次世界大戦でも連合国側について、ドイツに勝利する。景気は大いに沸き立ったが、大戦後は未曾有の大不況に襲われる。兼三郎は相場に失敗して大正9年に自殺する。そのあとを継いだのが、番頭の三輪常次郎で、この人が今の興和の基礎を作ったと言える。

昭和20年8月15日、日本はポツダム宣言を受諾、敗戦に追い込まれる。すべての日本人が意気消沈している時に、三輪はわずか10日後の25日に、失職してしまった陸軍、海軍の優秀な技術将校を雇い入れる決断をする。東京駒沢にあった陸軍衛生材料廠、愛知県の豊川海軍工廠(写真7)から集めた人材が、新しい働き場所を得て、21年には光学工業を、22年には薬品工業を立ち上げる。

会社名も平和を興すという意味をこめて興和に変更した。日本はその頃、敗戦の廃墟の中でもがいていた。

昭和25年、トヨタ自動車は大規模な労働争議に見舞われ、佐吉の長男の豊田喜一郎社長が退任に追い込まれ、三井銀行などの債権者団体は石田退三にトヨタ再建をゆだねる。石田はかって服部商店の番頭であり、当時は豊田自動織機の社長であった。石田は大変な経営手腕を発揮して、トヨタ自動車立て直しに成功する。トヨタは2度にわたって、服部商店に助けられたわけである。

興和は現在、愛知県最大のコングロマリットである。平成28年度の売上高は、1兆6千4百億円に達する。製薬会社であり、光学工業であり、名古屋キャッスルや観光ホテルといった名門ホテルを傘下に収め、さらには丸栄という地場の大手百貨店を擁する。興和という懐かしいカメラメーカーの、華麗で多彩な歴史の一端をご紹介した。

ワルツの悲劇

さて、服部兼三郎と豊田佐吉の友情は、興和とトヨタという企業となって実を結んだが、これから紹介するワルツとコパルの関係は、また違った意味で興味深い。ワルツ商会という会社は、カメラアクセサリーの大手商社であった(写真8)。ここで、ワルツ商会の社長、太田俊夫(写真9)を紹介する。大正2年生まれの太田は、大変文才のある人で、ワルツ商会が倒産した後に、小説家に転じ、30冊近い小説を書いている(写真10)。昭和47年には直木賞の候補にも挙がったほどの本格派である。日本橋の名家の出で、丹羽文雄の義弟でもあるという。その太田が自分の会社ワルツ商会を、コパルというシャッターメーカーに乗っ取られるいきさつを、小説という形で残している。あくまでもワルツ側から見た企業戦争の話であり、コパル側から見れば、とんでもない言いがかりだということになりそうだが、あくまでも小説からの推測ということで、話を進めていきたい。

ワルツの太田俊夫と、コパルの笠井正人(写真11)は戦前、日本商会というカメラを扱う商社で、机を並べた仲であった。1才年上の太田は東京の名家のぼんぼん、笠井は長野の山村の出と対照的であったが何故かウマが合い、一緒に上海に出張するなど、友情を深めた。戦後、太田は日本商会を引き継いで

写真 8　ワルツの商品

写真 9　太田俊夫

写真 10 太田俊夫の著作

写真 11 笠井正人

写真 12 ワゴーフレックス→

ワルツ商会を起こし、笠井はマミヤ光機の購買部長から、シャッター製作に乗りだし、コパル光機を創業した。

育ちが良い太田はロマンチストでもあった。アクセサリーだけでは物足りない。どうしてもカメラを作りたくなったのだ。笠井に相談すると大賛成だ。コパルにしてみれば、シャッターが売れるなら反対する理由が無い。千住に土地を確保して、ワルツはカメラの生産を始めた。1950年代の日本は、カメラブームに沸いていた。雨後のタケノコのように、カメラを作る企業が生まれていた。シャッターメーカーのコパルはそんな風潮を冷徹な目で見ていた。やがて激しい競争でカメラメーカーの淘汰が始まる。ワルツは1952年二眼レフのワゴーフレックス(写真12)からカメラ市場に登場するが、1956年にワルツ35を、57年に35-S、58年にワイド(写真13)、59年にエンボイ(写真14)と矢継ぎ早に新型を市場に投入する。しかし、資金繰りが次第に苦しくなる。太田は工場の経営は手に負えなくなり、笠井に相談する。笠井は信頼できる部下をワルツに派遣する。彼等はコパルの意を受けて、工場設備を増設しカメラを増産する。コパルのシャッターはどんどん発注される。ワルツの資金繰りは悪化し、ついには倒産に至る。引き金を引いたのは、1961年のキャノネット(写真15)の発売であった。高級イメージの強いキャノンブランドを、わずか1万9千円で販売されては、弱小メーカーはたまったものではない。しかし、キャノネットの情報を笠井はよく知っていた。なにしろキャノネットのシャッターは、コパルに発注されることが決まっていたからだ。それなのに太田には、まったく情報を知らせなかった。そして、ワルツが倒産すると、最大の債権者としてワルツの工場設備をそっくり手に入れる。極めて冷徹な仕打ちであった。人の良い太田は、その時初めて笠井の友情の裏側に気づくのだ。太田の小説には、実名は出していないが、この時の悔しさが生々しく描写されている。会社の経営は、人が良くてはダメ、ロマンチストはもっとダメ、将来を見据えて、時には親友の苦境にも目をつむる冷徹さが必要だと、太田は自戒をこめて書いた。

笠井の冷徹さは、後の茶谷薫重との特許紛争でも、遺憾なく発揮される。縦走りフォーカルプレーンシャッターのユニット化により、後の一眼レフのほとんどに採用されたコパルスクエアは、もともとは茶谷の発明した茶谷シャッターが原点だ(図1茶谷特許と図2コパル実用新案)。コパルは茶谷との共同事業として、飛躍的に売上を伸ばすのだが、5年も経つと茶谷への特許料の支払いをやめてしまう。茶谷は怒って訴訟に訴えるが、10年に及ぶ訴訟は茶谷を追い詰め、ついに訴訟資金が途絶え、断念せざるを得なくなった。

今やコパルは日本電産の傘下に入り、今年3月期の売上高は、466億円を超える世界最大のシャッターメーカーになっている。

日刊工業新聞社の「私の経営」に寄せた笠井正人の述懐によると、経営の原点は「人の和」と「誠実」だそうである。

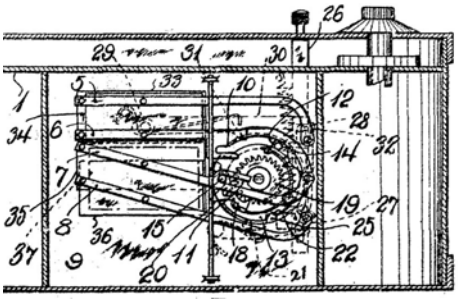

図1 昭和27年出願茶谷オリジナル特許(特公昭29-4471)。コパルとの紛争はこの後の改良特許。

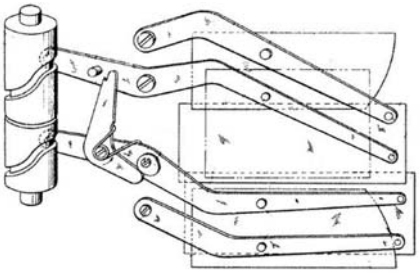

図2 昭和33年出願のコパルスクエア実用新案(実公昭38-24833)

参 考 文 献

トヨタ自動車75年史　愛知千年企業(中日新聞社)　私の経営(日刊工業新聞社)

太田俊夫著　カメラウォーズ(サンケイ出版)社長失脚(徳間文庫)社長悪の論理(日本経済通信社)

日本電産コパルの公式サイト　http://www.nidec-copal.com/ja-JP/corporate/outline/

写真 13 ワルツワイド

写真14 ワルツエンボイ

写真 15 キャノネット